



『お月様の月への手紙』

朔太郎

『がたんごとん』

拝啓

がたんごとんという電車の音が気にならなくなり、むしろその音がないと寂しくも思える今日この頃ですが、君は元気でお過ごしでしょうか。

窓の外からは夏の日差しが降り注ぎ、日向ぼっこの好きな猫たちはさすがに暑さに参ったのか、冷たい床の上でごろごろと手足を伸ばして寝転んでいます。僕はといえば、本を読んだり、猫と遊んだり、部屋の片付けをしたり、君にこうして手紙なんかを書いて適当に過ごしています。こんなゆっくりな昼下がりはそうして過ごすことが一番の贅沢だな、って最近よく思うのです。そうだよな？

贅沢といえば、やはり何も考えずにぶらぶらとその辺を歩くことも忘れてはいけません。ついさっきもタバコがないなと思い立って、近所に散歩に行ってきました。「ねえ、どこに行くの?」「お土産を買わないお出かけを認めることはできないわ」とにやあにやあ鳴く猫たちを尻目に、きちんと鍵を閉め、少し浅めにキャップを被り、半袖と短パンという格好をすると、とても気分がさっぱりとなりました。猫たちも連れて行くことができれば良いんだけど、さすがにそれは難しいので、イヤホンで一人の世界に入ります。相変わらずマンションのゴミ捨て場を見ると、早朝の新宿駅を見ているようで気が滅入りますが、踏切りを越えたところまで進むとまた気分が戻りました。そうやって好きな音楽を聴きながら、頭を空っぽにして歩いていると、その空っぽのスペースが少しづつ君のことで埋まっていくのがわかります。君のその声や、仕草や、笑顔、という具合に、まるでお店の陳列棚の上に商品を次々と埋めていくように、隙間なく満たされていくのです。そうすることで、一人でいる時間の退屈さも少しは紛れるのではないかな、と思ってます。寂しさなんかもね。

街はとてもゆっくりと時間が流れていました。小型犬を散歩させている女性、部活帰りの中学生、自転車で通り過ぎる若いカップル、玄関先で語り合っている主婦たち、手を繋いで歩いている親子連れ、そういった人たちを眺めるお婆さん、いつもの駅までの風景です。変わらない日常、変わっていく季節。これからもっと暑くなることを考えるといささかうんざりしますが、来月には旅行も控えているので、自然と口角が上がり優しい気持ちになれます。色んな思い出に変わっていく出来事が未来に控えていることを思うと、本当に君に出会えてよかったなあと思います。そして、今この隣りに君がいて、君と一緒に肩を並べて歩くことができれば、それはどんなに素晴らしく素敵なことなんだろう、と思いました。

仕事はどうですか？ 眠くはないですか？ 今この僕の過ごしているゆっくりと流れる時間を、少しでも君の睡眠時間に充てることができれば良いのだけど。。

では、また会える日を心待ちにしています。 敬具

『すやすやと眠れるように』

拝啓

昨夜はよく眠れましたか？ お風呂上りで暑いと言って、扇風機を使って髪を乾かしてませんか？ 初夏とはいえその部屋は外に比べると少し気温が低いので、また先日のように突然熱が出るんじゃないかととても心配しています。君はあのとき「緊張のせいで熱が出たの」と言ってくすくすと笑っていたけど、「あれ、家の鍵しめたっけな」と駅に着いたときにふと思うように、そして君が僕の偏食のことをよく心配しているように、僕はいつも何かの折に君のことを心配しています。寒暖の差と体調不良との関連性についての講釈や考察なんていうのは、毎日のように散々伝えているからさすがに煩わしいかもしれないけれど、我慢強いところのある君を思い出すと、やっぱりいつも気かけずにはいられません。だって、まだこちらも夜になると少し肌寒いから。……ちょっと心配し過ぎかな？ お酒のこともだけど、心配することが癖になっているかもね。

まあ、とはいえ僕もひとのことをどうこう言えるような生活を送っているわけではないんだけど、最近は、たばこを控えてみたり、意識して野菜を食べてみたり、歩く距離を延ばすために一駅前で降りてみたり、次の日が休みであっても早めに布団に入ってみたり、と健康のために少しずつ身体の改善に努めています。目に見えて何かが変わるというわけではないけど、満員電車でお年寄りに席を譲るように、何もしないよりはましなんじゃないかなって思うんだよね。そう思わない？

何か健康の話ばかりしていると、まあまあ歳をとったように感じてしまうけど（こんなことを書くと、君がまた自分の年齢を気にして「わたしの方が年上だけど大丈夫？」と質問するかもしれないけれど）、これから先例え歩けなくなって、例え言葉が話せなくなっても、君の素敵な笑顔が見られるだけで、多分僕は一生天気の良い日曜の朝のような穏やかな気持ちが続くんじゃないかな、と思ってます。年齢について強いて何かひとつだけ言うとしたら、もっと早く出会えていれば、その分もっと一緒に居られたな、ということくらいです。だからその点の心配だけはもう必要ないからね。

こちらは雨の音が聞こえます。

そちらはどんな音が聞こえるかな？

君がすやすやと寝息を立てながら寝ている姿を想像して、今日は眠りにつくことにします。

おやすみなさい。 敬具

『東京の街をひとりあてもなく』

拝啓

梅雨らしさというと風情がありますが、肌寒かったり少し汗ばんだり、気候が安定しない日々が続いているこの頃、体調など崩さず、元気で過ごしていますでしょうか？

サアア、という雨の音がアスファルトを静かに濡らし、夏の植物たちがその恩恵を体全体に受けているとき、僕は東京の街をひとりあてもなく歩いていました。左手には手提げ鞆、右手には小さな青い傘。傘と傘がぶつからないようにゆっくりと歩いていると、雨色に染まった街の風景が、いつもと違ってくっきりと見えます。この街で暮らすことは正直苦手だけれど、こうしてただ、並んだ高いビルや、舗装された歩道や、その横に均等に植えられた柳の木なんかを横目に見ながら歩いていると、寂しくてどうしようもなくなった僕の心が何故だか癒される気がします。それは、そろそろ帰ろうかなと考えていた、あまり好みの味ではなかったレストランの中で、たまたま好きな音楽が流れ始めたときくらいの癒やしに少し似ています。

歩くのにも疲れると、適当にその辺のコーヒーを飲める店に入ります。僕はもちろんホットの普通のコーヒーを飲みますが、アイスコーヒーを注文している人を見かけると、やはり君を思い出さずにはいられません。ミルクはひとつ、砂糖は入れなかったと記憶しているけど合ってるかな？ 今も隣りのお客さんがアイスコーヒーを注文していました。からんからんという小気味のいい音が、モーツァルトの室内楽に溶け込んで、優しく僕を包んでくれているようでした。例えばこの向かいの席に君がいて、いつもの穏やかな笑顔で、「美味しいね」と優しく微笑む。それを僕も笑顔で返す。こんな小さな幸せが今の僕にはたまらなく恋しいと思うのです。アイスコーヒー。今度僕も挑戦してみます。

雨足も細くなった頃、僕はまた街へと戻りました。またあてもなく歩きながら世界情勢のことを考え、消費税増税の延長のことを考え、健康診断の結果のことを考え、ドイツの医療費のことを考え、総合保険の保険料のことを考え、家で待っている猫たちのことを考え、そして君のことを考えました。君のことを考えると、あらためて人と繋がる幸せだったり、偶然だったりを実感し、ほんのちょっぴり不安になったりもします。もちろん、その不安というのは、出会えてなかったときのことを考えた結果なんだけど、こんなにも人を想う気持ちが自分の中にあったということの驚きなんかもあり、少しばかり混乱するときもあります。人を想う気持ちが強すぎると、それを失ったときの気持ちも同じように強く考えてしまうためなのかもしれません。

「また、センチメンタルになっているのね、気持ち悪いわ」とミシェルにばかにされるかな？

「センチメンタルって……」 「もちろん美味しくないよ朔ちゃん」という流れになりそうだけど。

君は今日も、何処かで楽しく笑っているのかな。それとも同じ空を見上げて、僕のことを少しでも考えていてくれるのかな。会っていないときの寂しさが、次に会ったときの喜びに変わることを祈って、もう少し遠回りしてお家に帰ることにします。 敬具

『君と猫に囲まれて』

拝啓

今日はひんやりと冷房の効いた（効き過ぎた）オフィスの一角で、僕はこの手紙を書くことにしました。こうも冷房が効いていると、今が夏なのかそれ以外の季節なのか、曜日感覚の狂ってしまった炭鉱工夫のように、体調なんかも少しおかしいことになりそうです。湿度やら温度やらを調節してくれているのは嬉しいんだけど、いつの間にか脱水症状になりそうなので、君もくれぐれもお気を付け下さい。

午前0時。かたかたというパソコンのキーを叩く音は、24時間鳴り止まない電話の音と重なって、何やら自分が社会の歯車のひとつとして機能している気になります。話しをしながらキーボードを叩き、キーボードを叩きながらまた話す。そしてまたもくもくとキーボードを叩きお客さんと会話を続ける。ただその繰り返しかけただけなんだけど、君が前に言っていた、たまに言われる「ありがとう」という言葉が、小さな問題を解決していただくだけのこの仕事の、ひとつの光明に僕も最近では思えてきました。誰のためでもなく自分のためだけに生きてきた自分にとっては、これは大きな成長ではないかと思えます。それもこれも、君に出会えたことで「誰かのために」という気持ちが芽生えた結果なんだと思えます。僕からも君に「ありがとう」を送りますね。いつもありがとう。

そういえば「最近仕事に嫌気がさすの。それでね、実は前の仕事の上司に誘われてて、お給料も今より上がるし。もちろん今より忙しくはなと思うけど、転職しようかと考えているの。ほら、お給料も上がれば今よりずっと生活も楽になるのよ？ ただ、二人の時間は減ってしまうかもしれないの」と君は言っていましたね。

仕事を変えることのメリットだったり、そうではないことだったり色々あると思うけど、自分が何が大事かを見極めた上でのことだったら、僕は特に反対はしません。ただひとつだけ知っていてほしいのは、僕はこれ以上の生活を望んでいないということです。君と向かい合って食事をして、他愛もないお話しをして、ときには意見が食い違って、足元には二匹の猫がいて、彼女（猫）たちは「あ、とご飯をねだってて、それを見て二人で微笑んで、抱き上げて嫌がる猫にほおずりをする。そしてまた二人で笑い合う。どう思う？ とても素晴らしいことだと思いませんか？僕は正直言って、君と猫に囲まれて暮らすことが、一番の“楽な生活”なのです。

過去に起こった出来事や、心と出てくる不適切な発言だったりをいちいち気にしたり傷ついたりする自分にうんざりするけど。多分僕以上に君は面倒に思っているよね。でもね、僕も君も生まれてから現在に至るまで十分傷ついてきたし、十分裏切られてきているのは同じだと思うから、もう少しだけお互いの気持ちがお互いに通じればいいのにな、と思えます。あと僕はおそらくこれ以上傷つくと、取り返しのつかない傷を負うことになるんじゃないかなと思うのです。あの、世界が一瞬で色を失って、呼吸が乱れはじめ、心臓がきゅっとなぐられたような悲壮感。言葉にもならない絶望感。何を言っても深い井戸の底に話しかけているようで、何を言っても地平線の彼方に吸い込まれてしまうようで、僕はあの気持ちのことを考えると何処にも行けなくなるのです。

こんなこと言っていると、またミシェルに笑われてしまいますね。

「また、そんなこと言ってるの？ いい加減にしなさい。バカみたいだし、ネガティブな男って嫌われるわよ」って。
(ほっとけ)

心から想う相手に想われる幸せが、いつか消えてなくならないよう、大事なことは何かを見極めなくてははいけません。そんなことばかり考えてても、もちろん何処にも行けないんだけど。

何だか今日はまとまりがなくなっていました。冷房が効き過ぎているからなのかもしれません。ちょっとエアコン

の温度を1℃上げてきます。

それでは。 敬具

『下り電車待ちのホームの上から』

拝啓

駅までの道でまた、家の近くに咲いている紫陽花や桔梗の花たちを眺めながら、僕は君のことを考えていました。週休日とはいえ特にやることもなく、やっぱり今日も手紙を書くことにしたのだけれど、ぼんやりとしていた時間が長すぎたせいか、うまく言葉が出てきません。実のところ、この手紙も何回も何回も読み返し、何回も何回も書き直しました（そうすることで、内容が改善されているかは別として）。せめて手紙くらいは自分の気持ちをうまく表現できれば良いのだけれど、山の中で道が突然途切れて迷ってしまうように、いざ書こうとすると、頭の中が真っ白になってしまうのです。多分、あれも言いたいこれも言いたい。あれは伝えなきゃ、これも聞かなきゃ、と考え過ぎてているせいなのかもしれません。

ところで、休日はいつも何をしてお過ごししていますか？ 普段、仕事もプライベートも充実させて忙しくしているから、たまの休日くらいはゆっくり身体を休めることができるのかな？ 一緒にいるときはいつも遅くまで起きていて、「寝不足が続くとお肌が荒れて、大変なことになるの。でもね、寝てしまってもったいないのよ？」とウィスキーグラスを片手に、今にも閉じてしまいそうな目を無理やり開いて笑って言う君を見る度に、「もうそろそろ寝た方がいいよ」と僕は言いながら、実のところ心の中では「このままいつまでも話していたいな」と思っているのです。くだらないケンカをするときもあるけど、ケンカしながらも、君の怒った顔まで「好きだなあ」って思ってます。今泣いた鳥がもう笑うように、2分後にはお互いまた笑い合っているしね。

君の疲れた顔や寝顔、食事している顔や、笑ったときの目や口や声、髪をひとつに結んだ後姿、他人を気遣う優しさ、真剣に野菜を切る姿。お酒を飲んだときにいささか頑固になることもあるけど、僕は君を構成するすべてのことが好きなのです。永久的な物事がないように、この気持ちというのを言葉だけでは保証出来ないかもしれないけれど、君がふと見せてくれる笑顔があるだけで、この想いは一生続くのではないかと思います。おそらく多分きっと。

“たまたま”な偶然のおかげで、こうして君と出会えたことを考えると、お互い孤独だった日々も何かひとつの準備期間だったのかもしれない。そう思いませんか？

そろそろ下りの電車がやってきました。ではまた。 敬具

追伸

夜間はときどき肌寒いので、くれぐれも風邪などひかぬようご自愛ください。

『気の利いた音楽の流れるカフェ』

拝啓

お元気ですか？ ヘリン・メリルやデューク・エリントンの気の利いた音楽が流れるカフェの片隅で、今日はこの手紙を書いています。遠く離れた場所へ行き、とても長い距離を歩いたせいか、何だか異様に音楽が身体に染み込んでいくのが分かります。それは流行りの曲にはない古き良き時代の魂に触れるからなのかもしれません。ロックやポップス、クラブミュージックには無い何か。ちょうど君との心地よい会話が、僕の心の琴線にふれるのと同じように、心の奥深くまで癒やされていくのです。何だか歳を重ねる毎に、ミュートの利いたトランペットやサックスの魅力が増していくように感じます。ヒット・チャートにもう少しジャズが入ってきてもいいようなものだけど……。今度機会があれば是非生の歌を聴きに行きましょう。もちろん、ワインと少しのチーズを添えて。

東京の空はどんよりと曇っていて、立っているだけで汗ばむようなじめじめとした気候です。これがもう少しするとさらに気温が上がり、もっと過ごしづらくなることを思うと今から辟易してしましますが、それと同時に楽しみでもあります。少し矛盾しているかもしれないけど、それは色々な君との約束がこの夏には待っているからです。大きな花火大会や夜景を眺めながらのドライブ、古都での散歩や南への旅行、想像するだけで胸がいっぱいになります。想像するだけでこれだから、実際そのときになるとどうなるんだろうね。何だかこわい。

あ、今またアイスコーヒーを持ったお客さんが隣りに座ったんだけど、座ったと同時に2秒もかからず一気に飲みました。それもストローで。2秒で。ずずず、という氷の隙間をぬって残りのコーヒーをすすする音が、何とも不快な気持ちにさせられます。せっかく落ち着いた気持ちで過ごしていたのにね。

話が逸れました。色々な思い出に変わる出来事が楽しみなのは本当だけど、でも、実のところ僕としては、別にただ君が横に一緒に居てくれるだけでいいんだよね。近くの広い公園に、大きな日傘と折り畳みの椅子と唐揚げ何かが入ったお弁当を持って行き、二人で静かに好きな本を読んで過ごす。喉が渴けばお茶でも飲んで、お腹が空けばお弁当でも食べて、疲れてきたらそのまま昼寝して、それにも飽きたら近くを散歩する。どう思う？ 想像するだけで僕は自然とにやけてしまいます。そういう休日の過ごし方もいいよね。

何気ない暮らしの延長に、ほんの少しの色味が加われば、僕はそれだけで多彩な思い出に変わる気がするのです。

そろそろ街に戻ろうかと思えます。君は仕事が終わる頃かな？

ではまた手紙を書きます。 敬具

『ごはんをよこせ』

拝啓

朝、ふと目が覚めると、真夏のような陽射しがベランダに差し込んでいるのが目に入りました。僕は何故だかそれを見たと同時に「洗濯をしなくては」という使命感が沸き起こり、猫たちがにゃあにゃあ「ごはんをよこせ」と騒ぐのを横目に、部屋中の洗濯物をかき集め（着ている物さえも脱ぎ去り）、眠い目をこすりながら洗濯機のスイッチを押しました。ごうんごうん、という音をしばらく猫たちと眺めていると、洗剤と柔軟剤を入れ忘れたことに思い当たりました。つまり水だけで洗おうとしたのです。洗濯機に洗剤を入れないなんて、海苔の巻いていないおにぎりのようなものです。食べられるけどただそれだけ。汚れは落ちるかもしれないけど、除菌まではできないよねえ、ということです。

君も知っていると思うけど、僕はいつも何か大事なことを忘れてしまうところがあります。時計を付け忘れたり、ひげをそり忘れたり、ヘアワックスをつけ忘れたり、携帯を置いて出たり、と。昨日にいたっては、家のカギを会社に置き忘れるという一番やってはいけないことをしてしまいました。どれくらいやってはいけないことかということ、電車の中で噛んでいたガムを、おもむろに隣りの人の髪の毛にからみつけてしまう（しかも女性に）、くらいやってはいけないことだと思います。しかも自宅から会社まではまあまあ距離があるので、取りに帰るのはなかなかの賭けでした。もしかしたら会社にはないかもしれません。途中の何処かで落としたということも考えられます。普段優柔不断な僕ですが、昨日の決断は早く、「無い」と思ったと同時に特に迷いもせず駅へ引き返し、ちょうど滑り込んできた電車に飛び乗りました。それというのも終電のことがあったからです。あまり長々と説明しても仕方がないので結論から言うと、カギは会社がありました。そして、終電は逃してしまいました。要するに終電を逃してしまったのです。電車で2時間近くかかる距離をタクシーで帰る気は毛頭なく、あーこっ（歩こう）、と思ったのは良いのですが、中学生のような甘い考えだったことはいくら僕でもすぐに気が付きました。でもね、僕にはその選択肢しかなかったのです。「ふうん、やることもやらないで朝帰りとは良いご身分ね」と彼女（猫）に言われるのは目に見えていたからです。あるいは彼（猫）に、部屋中の壁という壁をがーりがりと削られる危険性もありました。

夜の国道をひたすら歩いていると、何だか自分が物語の主人公になった気がしました。もちろん、そんな気になったのは最初の30分くらいのもものだけ。あとはひたすら文明の機器が横を通り過ぎていくのを憎み、カギを忘れた自分の愚かさを憎み、革靴を履いていることを憎み、暗いアスファルトを憎み、クリーニング屋の看板さえも憎みました。「おかえり」と言ってくれる人がいればまだ頑張れたかもしれないんだけど、家で待っている猫たちは、僕の事情などはお構いなしなので、僕が色々な看板を憎んでいる間、僕自身の帰りが遅いことを憎んでいたことでしょう。まあ仕方ありません。代償を支払うべきなのは僕の方だからね。

兎にも角にも、今日も仕事なのだけれど、入館証を忘れてしまったのは極め付けだと思います。もしかしたら君がいないことで、心が不安定になっているのかもしれませんが。僕の中に確保してある君のためのスペースが広すぎて、君がいないことでバランスを失っているんだと思います。このぼっかりと空いたスペースに、早く君との色々な思い出を詰め込んでいくことができれば良いのだけど。

それでは次会える日を楽しみに、また手紙を書きます。 敬具

『こんなところにいるはずもないのに』

拝啓

お元気ですか？カーテンレールに掛けてあるディスクディアの葉が風に揺れ、ハラハラと落ちる葉に猫たちが飛びつくの眺めながら、今日はこの手紙を書いています。最初に落ちた葉だけに執着することなく、次の葉次の葉へと気持ち移るいやすい彼(猫)らを見ていると、何故だか僕は大きな中華料理屋さんに並べられた丸いテーブルを思い出しました。あっちの料理も食べたい、こっちの料理も気になる、と少しも落ち着いてひとつの物を食べられない状況ですね。ちなみに僕が落ちた葉をひとつ拾って彼(猫)らの近くに放ってみたんだけど、きれいさっぱりとスルーされてしまいました。もしかしたら「ふうん」くらいは言われたのかもしれないけどね。

それはそうと、昨日は久しぶりの出勤でした。そして久しぶりの通勤路は、あらゆる目的地を目指す人々でごった返していました。少し沈んだ顔をしている人。浮き浮き顔で歩いている人。何かに遅れそうなのか焦り顔で小走りしている人。携帯電話に目を落としてもくもくと歩いている人。モデルのように颯爽と歩く女性。ヘッドホンに合わせて足踏みしてる男性。ひとりひとりの顔を覗き込むわけにはいかないけど、後ろで髪をひとつにまとめ、君の好きなネイビーのスカートにピンクのヒールを履いた女性を見かけると、どうしても目で追い掛けてしまっている自分がいます。「こんなところにいるはずもないのに」というフレーズ、あれって何気にすごいよね？

電車の中ではさすがに人を見るのにも疲れたので、今度は必死に広告などを眺めて過ごしました（目を閉じればよかったのか）。中でも扉の上で流れている紳士服か何かのコマーシャルで、「この夏は、サックスブルーのシャツが良い！」みたいなことを言ってるのには参りました。なぜかって？僕はそのときまさにサックスブルーのシャツを着ながらそれを観ていたからです。正直言ってすぐにもでもシャツを脱ぎ捨てたくなりました。だって、明らかにそれを隣りで観ていたサラリーマンが僕の方をチラッと横目で確認したから。。そのときの僕はデパートか何かの量販店に、間違っってその店で買った服を着てそのまま入ってしまったような気分でした。そういうときは「いらっしゃいませー」って笑顔で話しかけないでほしいよね。そう思わない？空気を読むこと。それが大事。

電車を降り、地下鉄から地上へと上がると、歩道を行き交う人々の吐息や、道路を流れる車の排気ガスが街の隅々まで染み込んでおり、江東区の街をすっぽりと灰色に包んでいました。訳のわからない成分で構成されたそれらの空気を吸い込みながら歩いていると、その中に微かに懐かしい海の香りがしました。しかし、見渡せど見渡せど何処にも海なんてありません。何処か遠くの土地から流れてくるその香りは、少しばかり僕をほっとさせ、もちろん君のことを思い出したことは言うまでもありません。こんな雑踏の中で懐かしい匂いを感じてしまうと、君とあのとき一緒に見た故郷の海のことを頭の中で反芻され、自然と笑みがこぼれます。それと同時にとても切なくなりました。くだらないことでもめたときに感じるようなあの切なさです。

僕たちがこれまでに築いてきたものなんて、ほんの些細なものでしかないんだけど（あるいはゼロかもしれないんだけど）、君との思い出の数が多ければ良いのか、若しくは思い出せる数だけあれば良いのか、どっちなんだろう？とふと思うときがあります。でもやっぱり、少しばかりの揉め事が起こったり、相手のことをほんの少し嫌に思ったりするときがあることがあれば、思い出の数が多いほど、仲直りも早いんじゃないかなあ、と思います。

ただ、ただ一緒にいることができる幸せが、当たり前にならないよう思いやりをこれからも大切にします。

それではまた。 敬具

『次は猫が寝ている間に』

拝啓

「あなたねえ、それは病気よ？」と彼女（猫）が突然僕に言いました。「あなたみたいな人、何年かに一度は出てくるみたいだけど、あなたまでの人はあまりいないわねえ。はっきり言って、異常だと思うわ。はっきり言って」

「そうは言ってもねえ」と僕ももちろん言い返しました。言い返さずにはいられなかったのです。「そうは言っても、好きなんだから仕方ないと思うんだよね。もちろん表現の方法をとにかく言ってるんだろうけど、それが間違っているとも思えないし、第一誰にも迷惑をかけていないと思うんだけど。だって、手紙を書いているだけだよ？」

「ふん。それが異常なのよ」

実際のところは、にゃあにゃあ言ってるだけなんだけど、こうして手紙を書こうとする度に、いやに彼女（猫）が絡んでくるのです。おそらく嫉妬しているんじゃないかなあと僕は思ってます。おそらく。君はどう思う？ 「気持ち悪い」と何処かから聞こえた気がするけど、き、気のせいだよ。もしかすると君とうまく付き合っていくためには、まず彼女（猫）に対して、まともなミルクとまともなカリカリを差し出すことが必要なのかもしれない。まあそれはもちろん僕が用意しておきます。だから気にしないでください。

冗談はさておき（本当に冗談なのかは今置いて）、先日の東京タワーはとてもきれいでしたね。皇居をぐるりと回り、いくつかの信号を越え、靖国の提灯を通り抜け、カフェで一息つく。そしてまた都内をぶらりと散歩し、木々に囲まれた東京タワーを目指す。

「本気の靴があれば、永遠と歩けるの」と君は言ってたけど、確かにスニーカーに履き替えた君は、とても生き活きとして見えました。僕はそんな君を眺めながらいつものように「好きだよ」なんて軽く言ってしまったけど、あまり言葉にするとその想いも薄っぺらに思われてしまうといけないから、少しは黙って微笑むことを覚えようと思います。この純粋な想いが劣化することはありえないけど、特別なときにだけ特別な方法で、きちんと自分の気持ちを伝えた方がより伝わるんじゃないかと思うから。でも、結局また君の一挙一動を見ながら「好きだよ」なんて言うんだろうけど。確かに病気かもしれません。ミシエルの言う通り。

この前なんて、眠ってしまうのがもったいなくて、寝ている君を横で眺めていたんだけど、ふいに君が目を覚まし「良いことを思いついたわ。ねえ、これからはあなたの隣りじゃなくて、後ろをついて歩くの」と言い出しました。

僕はびっくりして「突然どうしたの？」と聞いたら君は「ちゃんと聞いて。そうすればね、うん。後ろ姿をずうっと眺めていられるでしょ？」と答えました。そのときはそのまま眠ってしまいましたが、僕が翌朝になってその話をしたとき、「そんなこと言った？」と言ってまるで覚えてなかったみたいだけど（寝ぼけてたみたいで）、そのとき僕は、例えるのが難しいほどの幸せを感じていました。ちょっとうまく言い表せないし、月並みな表現になってしまうかもしれないけど、それはまるで、砂漠に放り出されてひどく喉が渇いているときに差し出された一杯の水のような、若しくは暗い森の中を彷徨っているときに突然木々の隙間から差し込んできた月の明かりに癒やされるような、そういうふわふわとした幸せな気持ちに包まれていたのです。

伝わるかな？ 僕はいま幸せです。

猫がにゃあと鳴いて、それを君と二人で眺めている。

「お腹が空いたの？」と猫に訊ねると「わたしも空いた！」と君が答える。

そしてワインを注ぎ、君の好きなサラダを添える。

僕もそれに少しだけ付き合う。

言いたいだけの争いや、時間だけが無駄に過ぎていくケンカはもうしたくないよね。

いくつかのまだ少ない思い出を頼りに、いくつかの新しい思い出をまた築いていければ、この気持ちが永遠のものになるような気がしてなりません。

それではまた手紙を書きます。

次は猫が寝ている間に。 敬具

『美味しいパンのお店』

拝啓

各地では例年より早く梅雨明けが宣言され、海や山や海外渡航などが最近の世間の話題になっている今日この頃、君は元気でお過ごしでしょうか？ 梅雨明けについては、毎年のように「例年より早く」と言っているのを耳にしますが、どうせなら元々の基準値をその“例年より早い”日付に変えてしまえば良いのと思えます。ねえ、この話は誰に言えば伝わるのだろう？ やっぱり気象庁かな？

気象といえば、先日の大雨には二人してまいりましたね。直射日光にやられないよう日焼け止めを丹念に塗りこみ、長時間歩いても疲れないういつもの本気の靴を履いたにもかかわらず、結果的に日焼け止めは流れ落ち、靴はビーチサンダルの方が良かったという結果で、僕は正直苦笑いするしかありませんでした。救いといえば、僕はネイビーのキャップを被り、君は黒の小さな日傘をさしていたことでしょうか（あの大雨の前では大して意味を成してなかった気はするけど）。ただ、こんな状況でも「これはこれで良い思い出になるわ」と言ってにっこり微笑んでいた君を見て「そういえば君の口から不平や不満を聞いたことがないな」と思い、僕は少しばかり恥ずかしい気持ちになりました。君のストレスはどこに吐き出しているのだろう。僕も君を見習わなければならないですね。

雨に濡れて散々だったとはいえ、二駅先のパン屋さんまで歩いて行って購入したパンは絶品でした。塩パン、レーズンパン、ソーセージパン、あんにホイップがからまったあんぱん。どれを食べても初めて口にしたような得も知れない幸福感に包まれるような味でした。今回は買えなかったけど、あの、見た目は何の変哲もない食パンも、もしかしたらこの分だともんでもない美味しいパンなのかもしれません。ぜひ今度は食パンも買しましょう。もちろん一斤まるごと。パンは正直あまり好きではなかったのだけど、あのお店のパンはまた買いたいなあ、と思いました。

話は変わりますが、君が流した涙の訳を、僕は一晩中考えてました。「あなたには一生わかりっこないわ」とミシェルは言っていたけど、今回についてはすべて僕が原因なんだと思います。君に対する気持ちが強いばかりに、それと同じ気持ちを君に求めてしまい、せっかく二人で楽しめたはずの深夜のドライブが、まるで深い海の底をあてもなく泳いでいるかのような、そんな途方もない暗い気分させるドライブになってしまいました。表現の仕方なんて人それぞれなんていうことは知っていたはずなのに、なぜあるとき僕は君を責めてしまったのだろう、なぜ途中で気付いたにもかかわらず、流れを変えることができなかつたのだろうと、とても愚かだったと今では思います。それは強い風の日、開き切って閉じなくなった壊れた傘よりもくだらないエゴです。僕は自分の気持ちを押し付ける余り、目の前のことばかりしか頭が回ってなかったのです。鼻持ちならないとしか言いようがありません。不平や不満を言わない君が、唯一僕に対して表現できる方法があつたんだと思います。

「世界は優しいものだけで出来ている」といつか君は言っていましたね。君にしかできない愛情表現を、いつか僕は少しずつ見逃してしまっていたようです。遅すぎるかもしれないけれど、自分自身の独りよがりな考え方を、僕は全面的に改めないといけないと思います。

「君は僕の気持ちをわかってくれない」と僕が主張していたように

「あなたは どうして私の気持ちがわからないの？」と君は主張していたんだね。

これまで簡単に仲直りできていた訳も、どうやら同じ理由によるところだったのを、やっと僕は気づくことができました。

「もうそんなことは忘れたわ。ねえ、私は一晩寝ればすぐに忘れることができるの」と君は言ってくれましたね。その気持ちに甘えることはもうしないよ。

ガラス窓に映った、頬を伝わる涙の筋を、僕は忘れてはいけないと思うから。

それではまた。 敬具

『今が過去になる未来』

拝啓

こんにちは。お元気ですか？ 夏とはいえ、気温が上がりきらない毎日ですが、風邪などひいていないでしょうか。一緒に撮った写真を右手に見ながら、あまり身体の強くない君を今僕は手紙を書きながら心配しております。何て言いながら、隣の部屋で君はすやすやと寝てるんだけど、遠く離れた土地にいるように、心の距離がなかなか縮まらない錯覚に陥っているのは僕だけでしょうか。

理想と現実のギャップというものを隙間なく埋めるには、まだ僕たちが一緒に過ごした時間というのは短いかもしれませんが、過ごした時間に関係なく、僕は君のことがとても大事で、君のことをとても愛おしく思っています。おそらくはその強すぎる想いのせいでこういった気持ちになっているだけだと思うので、もう少しばかり心にゆとりを持って君と接しなければならぬのかなあ、と思います。環境の変化についていけず体調を崩しがちな君を見ると、僕は反省ばかりの毎日なのです。疲れてしまうよねえ。安定とは程遠いけど、この先はきっと一緒なら乗り越えられると思うから、お互い後ろを振り返らずに過ごしましょう。

午前4時。玄関のドアの外にいる鳥たちが鳴く声と、換気扇が回る音以外は、この部屋はとても静かです。もう少ししたら猫たちが「ご飯が食べたい！ どうしてもご飯が食べたい！」とにゃあにゃあ騒ぎ始めたり、壁をガーリガリとやり始めるんだらうけど、静けさに支配されたこの僅かな時間帯が僕は好きです。どのくらい好きかという、ふらふらと目に付いたお店に入って食べた煮魚の定食が、思いのほか絶品だったときくらいでしょうか。普段はあまり入らないお店だけど、たまに行きたくなるような味。いつもは眠っている時間だけど、たまに起きてみると心が安らぐ時間、というくらい好きなのです。わかりづらいな？

先ほどは、眠っている君を起こさないように、本気の靴を履いて少しばかり遠くまで散歩をしてきました。市道から県道に入り、ずうっとまっすぐ進んで国道をぐるっと回る。そしてコンビニで温かいコーヒーを買い、たばこを二本ばかり吸いました。知ってましたか？ 真夜中から朝方にかけてのこの時間帯になると、あれだけ昼間混んでいる国道も、まるで映画の中の壊滅してしまった都市のようにがらんとしていました。車も通らず、誰ともすれ違いませんでした。ひとりで歩くには少々寂しくもあったので、ぜひ今度は一緒に散歩しましょう。きっと君もその雰囲気を感じていると思います。

そういえば、先日一緒に食事したお店の料理はこれまでに味わったことのないくらい美味しい料理でしたね。もちろん君と一緒に食べたから美味しかったのもあるけど、それを差し引いたとしてもかなりの絶品だったと思います。名前を忘れてしまったけど、あのシュークリームの生地のようなパン。厚めに切ったローストビーフ。トマトとバジルのスパゲッティ。ウエルダンに焼いた肩ロース。そして付け合わせのマッシュポテト。君の作る無水の肉じゃがと同じくらいでしょうか。うん。今思い出してもよだれと共に記憶がよみがえります。

ねえ、僕は君の邪魔になっていないかな？

君の悩みをただ横で「うん、うん」と聞く。

ただそれだけすら出来なかった僕を許してくれるかな。

不安定なことばかりで悩ませてしまって申し訳なく思います。

幸せな時間が多い分、とても神経にさわるよね。

今が遠い過去になるまで、ずっと一緒に過ごせることができれば素敵なんだけど。

仲間内だけで伝わる冗談のように、笑い飛ばせるくらいの未来まで。

そろそろ猫たちが起き出してくる時間になりました。

猫たちにご飯をあげたら、君の寝ている隣りでごろりと横になり、寝顔を眺めながらウトウトしようと思います。

それだけで僕は幸せなのです。

ではまた。 敬具

『それはご飯の時間の少し前のこと』

拝啓

それはまるで靴の中に入り込んだ小さな石ころのように、わずかな、でもはっきりとした存在でした。何度払いのけても出て行こうとしません。むしろ追い払おうとするごとに心の奥へ奥へと入り込んでいくのがわかります。何処から入ってきたのかもわからないのに、一向に出て行ってくれないこの違和感の正体について、僕は僕なりの答えを出して、少しずつ向き合おうと思います。そうすることで、君の負担を少しでも軽くすることができるかな？ だって、そうしないことにはお互い何処にも辿り着けないよね？

ねえ、僕は今またこんな時間に手紙を書いています。夜から朝にかけてのいつもの時間帯。あんなに黒く塗り潰されていた空の色が、いつの間にかぼんやりと薄く白くなる時間帯です。いつもと違うのは、猫たちがぞろぞろと起き出して、「何してるんですか？ ご飯の時間なのですか？」って顔をしてテーブルの下から見上げていることです。あのご飯を訴えるときの彼(猫)らの目については、君もよく知っていると思うけど、人生においてなかなか抗うことのできない……失礼、できないことの一つではないかと思います。それを無視だか拒否しようものなら、壁をガリガリやられてしまうのはもちろんですが、僕の心の奥のとても深い底の方で、何かがチクッと痛みます。でも仕方ないよね。あげ過ぎれば太ってしまうから。なので、今日も心を鬼にして「ダメだよ。さっきあげたでしょ？」と言って、まるで子猫をあやすように(もう子猫じゃないけど)、ゆっくりと諭すしかないのです。まだご飯をあげるには早過ぎる時間だからね。

猫は不思議ですね。さっきまでにゃあにゃあ騒いでいても、しばらく放っておくと、気がつけば静かにすやすやと眠ってしまいます。声をかけても片目をちらっと空けて、尻尾で返事をする程度です。ちょっとしたことなら、すぐに忘れてしまうのかな？ 僕なんて、嫌なことがあるといつまでも途方もなく相手が呆れてしまうまでしつこくぐちぐち言ってしまうタイプなので、相手が呆れてしまう前に自分自身に呆れてしまうことがあります(「確かに」って声が何かテーブルの下から聞こえてきましたが、とりあえず無視することにしました)。

簡単なことほど難しいことが多いこの世の中は、何だかたまに息苦しくなりませんか？ ひとつの問題をクリアしても、また次の問題が現れる。それをクリアしたとしても、またすぐに次の問題が現れる。その繰り返し。もしかしたら人間というのは、わざわざ何かの問題を自ら探してしまう生き物なのかもしれない、と最近になって思うようになりました。多分誰もが幸せを望んでいるくせに、いざ幸せになると、その幸せに慣れないがために、周りをキョロキョロと見回してしまうんだと思います。ちょうど、病気を恐れて何回も繰り返し検査をし続けるのと同じように、問題を見つけることで、実は心の何処かで「ほらね、やっぱり」と安心してしまっているのかもしれないね。あんまり信じたくないけど。。

君の思う幸せって、何ですか？

ごめんなさい。ひとことでは難しいよね。

あ、猫がまた思い出したかのようににゃあにゃあ鳴き出したので、ちょっと外に散歩に出てきます。

続きはまた。 敬具

『ねえ、知ってた？』

拝啓

夏らしいともいえる陽射しが、雲ひとつ無い青空から容赦なく降り注ぎ始めた7月最終日、肌のあまり強くない君は、元気に過ごせていますでしょうか。以前駅中で君に買ってあげた、小さな星が散りばめられた、柄が金色のあの黒い日傘が、こんな暑い日にはとても活躍しそうですね。少しでも君の役に立っていることを思うと、僕はひとり空を見上げながら、嬉しい気持ちでいっぱいになります。まあ「夏なんていっそなくなればいいのに」とぶつぶつ言いながら汗を流して歩いている僕にこそ、日傘が必要なかもしれないけど。でもね、先日までのような、日中でも気温が低かったり、曇った空に太陽が遮られてしまったりという日が続いていると、この暑い陽射しさえも恋しく思ってしまうのです。出たら出たで煩わしいし、無いなら無いでさびしく思う。これはもしかしたら、本当は夏が好きなのかもしれません。“恋”と認めたくない、冷やかされたくないから本音を隠す、まるで思春期の中学生みたいですね。うん、夏がほんのちょっと好きみたいです。君は好きですか？ まだもう少し夏は続くと思うので、残りもしっかりと楽しみましょう。

楽しむ、といえば、神楽坂のお祭りは久しぶりに楽しめました。特に出店があったわけではないけど、子どもたちの阿波踊りも見ることができたし、本場の阿波踊りの衣装も見ることができたし、とても雰囲気を楽しむことができました。やはり神社でのお祈りが効いたのかなあ。二人してあんなに寝不足だったのに、ぱちっと目が覚めて、また二人で長い距離を歩くことができたのはすごいことだよねえ？ 君も言っていたように、神社で始まり、お寺で終わる。二人にしか分からないことだけど、二人さえ分かっていたら良いことが増えるのが、僕はとても嬉しいのです。

帰りがけに食べたスイカパー。涼みに入ったコンビニの中。ぶどう果汁の炭酸水。並んで座った護国寺の境内。電車で読んだライオンちゃん。スーパーまでの駅からの道。安い、と笑ったスニーカー。陸橋を越えて、マンションへと辿る道。頭の中にある記憶の引き出しに単語単語で付箋を貼り付け、それらをいつでも引っ張り出せるように、二人だけの思い出としてしっかりと刻み込みました。もし君がこの先すべてを忘れたとしても、この手紙を読んで思い出させるように、これからも僕が僕の想いと共に二人の思い出を少しずつ記していこうと思います。

ねえ、知ってた？

どれくらいの想いが君に伝わっているかわからないけど、君が想像しているよりほんの少しだけ、僕は君のことが好きなのです。

例えばそれが大き過ぎる想像であっても

例えばそれが小さな想像であっても。

それではまた手紙を書きます。 敬具

追伸

夜のセミは何故あんなにも怖いんだろねえ？

『雨、そのとき思うこと』

拝啓

そのとき僕は仕事の仕上げに取り掛かったところでした。何気なくブラインド越しに窓の外を眺めてみると、不穏な色の雲が東陽の街を包み込み、ビルというビルの上からダークグレーの絵の具を満遍なく降り注いだように、街全体が灰色に染まっていました。そして、パラパラという音がしたかと思うと、その次の瞬間ザアアという音と共に物凄い雨が窓を打ち、気がつくのと同時に就業時間は過ぎておりました。そう、しばらくの間僕はその風景に釘付けになっていたのです。

容赦無く降り注ぐ雨。一瞬で曇ってしまった窓。これから家に帰らなければいけないことを考えると、今までの僕であれば少々心が折れそうになっていたかと思いますが、君が家で待っているというのは素晴らしいですね。ただそれだけでちょっと雨なんて気にならないことに気がつきました。

ビルのエントランスは雨宿りをする人々で溢れかえり、皆それぞれにひそひそと夢中で話し込んでいました。見つめる先は雨を、その声で話す内容も雨、という風に。おそらくは共通の話題を持つことで、突然の雨に濡れてしまった靴やズボンや靴下を履いているストレスを忘れようと努めているのでしょう。わかります。濡れた靴下を履いて歩くくらいなら、鼻の下にわさびでも塗られた方がましだねえ？ 君はどう思う？ まあでも、頭痛がしているときに腹痛の方がましだ、と思ったり、腹痛がしているときに頭痛の方がましだ、と思ったりするのと同じで、実際にわさび何て塗られようものなら、涙や鼻水にぐしゃぐしゃにやられて後悔するのかな？ これなら雨の方がましだ、と。何でわさびの話になったんだっけ。

そうそう。

同封した写真は見てくれましたか？

雨を写真で撮るのは、思いの外難しいことだと思いました。何処を向いても大粒の激しい雨が降り注いでいるのにもかかわらず、水溜まりやそこに跳ねる水がなければ、写真の中の風景は、ただ曇り空の広がる街の風景にしか見えないのです。むしろ、「さっきまで降ってたんだねえ」程度のもの。レンズ越しに広がる景色が、自分が今見ている景色と同じように写れば良いのだけど、それを実現するにはもう少し自分の撮影の技術を上げることと、手にしている携帯電話のカメラ機能を向上させなければ難しいのかもしれない。それでもね、こんな拙い腕ではあるけど、今度君のあの素敵な笑顔を撮ることが出来れば嬉しいです。

僕の小さな携帯電話の中に、クスクスと笑った君の笑顔を開き込める。

その瞬間は永遠で、決して色褪せないデジタルの不思議。

変わらない写真、年老いていく二人。

それらを同時に楽しめるなんて僕はとても幸せです。

それではまた、手紙を書きます。 敬具

『静かな図書館で』

拝啓

お元気ですか？ 通勤途中、いつもよりがらんと空いた日曜の午後の電車で揺られながら、やけに効き過ぎた車内空調の中で今日はこの手紙を書いています。

昼間の電車は珍しく静けさに包まれていました。お祭りに向かう浴衣姿の女性たちも、部活帰りの学生も、汗を拭いているサラリーマンも、皆思い思いの顔をしながらゆったりと午後のひとときを過ごしているようでした。もしかしたらこの静けさは、昼間特有の小さな子どもたちがいないせいなのかもしれません。こんなに静かなひとときを過ごせるのなら、女性専用車両があるように、親子連れ専用車両があればいいのになあ、とこのとき僕は思いました。もちろん僕の行き届いた子どもであれば問題ないのですが、どんなに静かとしても、ある一定の年代の子どもたちは、大人たちが何を言ったとしてもおもちゃ箱をひっくり返したような騒ぎを巻き起こさずにはいられないからです。そんなとき親子連れ専用車両があれば、親御さんたちは気兼ねなくお喋りにいそむことができるし、子どもたちも怒られることなくしゃぐことができるでしょう。これはなかなか良い考えだと思うんだけど、君はどう思う？ 各社一斉にスタートさせるのは無理だと思うので、まず自分の乗る路線の私鉄会社だけでも、嘆願書を提出したいと思います。だって、決められた時間になれば電車は次の駅へ進むけれど、ただ黙っているだけではこの願いは自然と叶う種類の物事ではないもんねえ？ まあでも、前にも言ったけど、静かな時間を手に入れたとしても、すぐ次の問題が目につき始めるからあまり意味はないのかもしれない。例えば、“におい”とかね。

ひとりで静かに揺られるのも良いけど、先日一緒に横浜まで行ったときは、あまり好きじゃない電車も楽しく過ごすことができました。ちょうど花火大会と重なってしまったから、あの人の多さには辟易したけれど、長時間電車で揺られるとしたら、やはり二人で乗った方が楽しいのかもしれない。片方だけ座って片方だけ立ったりだと楽しさも半減するけど、この前みたいにずっと並んで座ることができれば一番良いですね。僕の左手が君の右手に触れ、何を話すでもなく、ただ並んで座る。静かな図書館でぼうっと座っているように、そこに流れる親密な空気は、誰にも邪魔されることのない二人だけの時間なのです（と言いながら、斜め前に立ってお尻をぴくぴくとさせていたサラリーマンにはまいったけど）。

――正直言って、君に教えてもらった中華料理屋さんの味にはびっくりしました。中華料理の味にはちょっとうるさい僕にさえ、本当に今まで食べたことのない美味しさで、「美味しすぎて毎週のように通っていたの」と言って笑っていた君の気持ちがよくわかりました。確かにあの味であれば毎週でも食べたくなるよね（毎日でも食べられそう）。あつあつの海老ワンタン、鶏肉の蒸し焼き、とろとろ卵の天津飯、どれを食べても外れの無いお店というのは、とても気分が良いものですね。ぜひまた足を運びたいなりました。ひとつだけわがままを言うと、僕の大好きな“木須肉（豚肉ときくらげの卵炒め）”がメニューになかったことだけど、広東料理の店だから仕方ないか。今度は違う店も行ってみませんか？ 良く晴れた午後に、中華街を探索する。そして目についた中華料理屋さんにふらっと入る。当たりかもしれないし、外れかもしれない。外れであればまた次を探す。とても楽しそうだよな？ この前みたいにお店ががらがらだったら良いんだけど、あれは花火大会と重なってたからねえ。

そういえばまだ今年は花火を見てないよね。夏も後半に突入したけど、夏が終わるまでに一緒に見られるかな？ 大切

なひとと、大切な思い出を増やしていくことが、今の僕の大きな楽しみのひとつだけど、見れなかったら見れなかったでまた来年もあるので、ゆっくりと二人の時間を刻んでいきましょう。

二人手をつないでコンビニまで歩く、それだけでも大切な思い出になるから。

それではまた、手紙を書きます。

暑さにはくれぐれも気を付けてくださいね。 敬具

追伸

なぜ中華街には、帽子屋さんが多いんだろうね？

『僕は気にしないことにしました』

拝啓

柏葉ゴムの葉が少しずつ背を伸ばし、カーテンレールから垂れ下がるアイビーの葉と相まって、この部屋の窓際がすっかり緑に埋め尽くされようとしています。陽当たりがあまり良いとは言えないこのリビングで、彼(観葉植物)らはそれでも日に何時間かの採光を慈しんでいるようです。そして青々と葉が育っていくその姿を見るのが、今の僕の楽しみのひとつなのです。もちろん、君と一緒に購入したシダ植物やコウモリランなんかも、サンタリーで順調に育っています。窓があり、意外と光が入ってくるバスルームならお水をやり忘れることがないから、ここにも置いたのは正解だよね？この調子で、部屋全体に少しずつ増やしていきましょう。終わりは無さそうだけだね。

そうそう、先日買ってきた大量のディナーロールはとても美味しかったです。あまりにも大量だから「食べ切れるわけがない」と安易に考えてましたが、毎朝食べているとみるみる減っていくものですね。冷凍する必要なんてなかったかもしれませぬ。でもね、パンを冷凍して保存するなんて、天動説推進派の民族が、宇宙の中心は太陽なんだ、ということに思い当たらないように、今までの僕には思いつきもしませんでした。こんな方法があるのなら、あのときのあのパンも、あの時のあのパンだって、もしかしたらカビが生えることなく美味しく戴けたかもしれません。そう思うと知らないっていうのは罪だよなあ。まあ、パンはあまり好きじゃないけど。

それでもたまに食べたくなるパン。カリッカリに表面を焼いて、たまごサラダを載っけてがぶっと食べるのも良いし、バターを挟んでレンジでふんわり温めてとろとろに溶かしてハフハフっと食べるのも良い。マーガリンの人体への悪影響なんて、カップ麺を食べることによる内臓への影響の方が遥かに問題だと思うから、僕は気にしないことにしました。だって、トランス脂肪酸による発ガンリスク何かより、この季節にその辺を日傘無しでうろろろする方がよっぽどリスクが高いと思うから。。そう思わない？

ねえねえ、今君が一番欲しい物は何ですか？ アウトレットでは欲しい物が買えなかったみたいなので、何だか僕だけ楽しんでみたいで悪いなあ、という気持ちになってたんだよね。僕が喜ぶ姿を見て、それだけで私は嬉しいの、って君は言うけど、僕だって君が喜ぶ姿を見るだけで幸せなんだよ？ だから今度は君の欲しい物が見つかるといいなあと思ってます。

両耳に下がった金色のピアス、眉にかかった癖のある髪、ピンク色の半袖のブラウス、ダークネイビーのくるぶしまでのパンツ、少し高めヒールのパンプス、これ以上不足している物は何も無いかもしれないけどね。

体調はどうか？ 肩凝りや頭痛に悩まされてませんか？ そのときはいつでも言って下さい。少しでも君の力になれば幸いです。

それではまた。 敬具

追伸

君が買ってくれたブルーのシャツは、すでに僕のワードローブになりました。

『あまりにも静かな夜』

拝啓

雲の後ろ側に姿を隠したままの太陽、まだ気温が上がりきらない、比較的過ごしやすい夏の日の早朝、僕は会社の仮眠休憩室で目が覚めました。そして、何故だか無性に君に会いたくなりました。まだおそらくは夢の世界にいる君の隣りに寝転び、「おやすみ」と言いながら君の手を握り、君の頬に口づけ、またゆっくりと目を閉じる。考え出すとダメですね。まだ起きる時間までもう少しあるにもかかわらず、眠気だけが頭のまわりをくるくると回っているだけで、一向に寝つけなくなりました。少しでも眠らないと残りの就業時間を乗り越えることが出来ないだけどね。

寝ないといけない、と考えるだけで、なぜこうも眠れなくなってしまうんだらう。どうせ眠れないのならいっそ起きてしまえば良いのかもしれないけど、眠気があるのに眠れないのです。君がまだ夢の世界に浸かっているときに、僕はひとり君のことを考えた後、あの猫型ロボットが持っている眠気を吸い取ることでできる秘密道具のことばかりが、頭をぐるぐると駆け巡っていました。遠足前日というわけでもないけど、もう今日は諦めてまぶたをゴシゴシとこすりながら、こうして手紙を書くことにします。

先日訪れた東京タワーは相変わらずキレイでしたね。当初はいつも通り、あのトリコロールのカラーリングを近くから眺めるだけの予定だったけど、ふと思立って大展望台まで登ったのは正解でした。味付けを変えるだけでまったく違う物になる卵料理のように、既にルーティン化しつつある物事にほんの少し手を加えるだけで、あんなにも特別な時間になるんですね。観光客向けに設定された特別展望台までの料金にはまいったけど。でも、プラネタリウムのような演出と、東京の街をのぞみながら食べるソフトクリームは格別で、この国で生きてる僕ではあるけれど、外国人観光客に混じって、海外旅行に来たような気分になってました。10数年前と違い、周囲にビルが立ち並んでおり、目に飛び込んでくる景色は当時ほどの迫力はなかったけど、それでも十分過ぎるほど僕は満たされたのです。もちろん、それもこれも君が隣りに居たからなんだけどね。

あまりにも静かな東京の夜の景色は

いつまでも消えることない

二人だけの思い出のひとつに。

そろそろ休憩が終わる時間になりました。

それではまた、手紙を書きます。 敬具

『香箱座り』

拝啓

つんざくような蝉の声、うだるような真夏の陽射し。比較的涼しいこの部屋でも、うちで飼っている黒い猫は、ソファの上で警戒心のかけらもなく手足を四方に伸ばしてぐったりとしています。僕はエアコンがあまり好きではないので、扇風機のスイッチだけを入れ、猫を横目に眺めながら、今この手紙を書いています（もう一方の猫はどこに行ったんだろう？）。

君も知ってるかもしれないけど、猫との生活はとても楽しく安らぎます。ずうっと香箱座りしているのを見てるだけでも飽きがこないし、うろうろしているのを見ていだけでも愛着があり、どんなに嫌なことがあって帰って来ても、玄関の扉を開けて、猫が「にゃあ」と鳴くだけで、暗い井戸の中に一筋の灯りがともされたかのように、温かい気持ちになるのです。おそらく、僕が僕として今こうしてここまで存在を保つことができてきたのは、この二匹の猫のおかげです。何処に行くにも一緒、というわけにはいかないけど、猫は猫の、僕は僕の領域を保ちながら、お互いがお互いの心の拠り所として、うまくやっていけるんじゃないかなあ、と思ってます。もちろん今は、パズルの空いたスペースを埋めるように、君がこの関係にピタッとうまく入り込んでくれたことによって、線と線だけの関係だったものが、猫、僕、君、という綺麗な輪になり、より完成した関係が出来上がっています。僕はそれがたまらなく嬉しいのです。表現や形は違えど、君も同じ気持ちでいてくれると良いのだけど。

ただ、やはり今思うのは、猫たちがいなければ、僕らはここまでうまくやっていけなかったかもしれない、ということです。あまり人と関わるのが好きではなく、どちらかというと苦手な部類な物事ではあるので、君と出会わなければ心のどこかに隙間を抱えたまま、いつまでもそれが何かわかることもなく、猫と僕だけの関係で何となく満足していたのかもしれない。よく、「え？ 知らないの？ それは人生損してるね」というセリフを聞きますが、まさにそういうことなんだと思います。

今、お膝の上に珍しくもう一方の白くて灰色がかった猫がやってきました。彼女（猫）はたまにこちらを見上げながら、ひたすら毛繕いをしています。良いです。とても穏やかな気持ちになります（いささか暑いけど）。

猫との話ばかりになってしまいましたが、先日一緒に歩いた、浅草の町のことを書こうと思っていたのをすっかり忘れていました。格安の浴衣と雪駄といえば、と思って浅草に行きましたが、ああいう風目的を持った散歩をするのも楽しかったですね。仲見世通りの人の多さにはうんざりしたけれど、人の良さそうなおじさんに、雪駄と草履の違いも教えてもらったし、外国人観光客が多いだけだから、日本人として寛容な気持ちにならなければ、という思いで乗り越えました（さすがに雷門の前までは行く気になれなかったけど）。

しかしまあ、陽射しがかなり強かったので、君が暑さで参ってしまわないかひやひやしていま

した。日陰のない一本道。距離的には大した距離ではなかったけど、浅草から上野までの道中、僕はこんがり焼けてしまいました。君は日焼け止めが役に立ちましたか？ 途中立ち寄ったカフェで疲れた顔をしていたので少し心配です。ああいう陽射しがじりじりと照りつけている中だと、サングラスは必須ですね。次回は必ず持って行きます。君も紫外線カットのメガネを買ったことだしね（もう電車の中やお店の中に忘れないようにしないと）。

次はどこに行けるかな？

それではまた、手紙を書きます。 敬具

『カランコロんと』

拝啓

ドン、ドン、ドン。

宮下公園から東の坂を登り、モデルルームを左に抜けたところで姿の見えない音がしました。都会のど真ん中で聞くその音はとても現実離れした大きな音で、思わず二人、目を見合わせ輝かせたのを覚えていますか？

思えばこの夏、二人で花火を見たのは初めてのことでした。いや、二人出会ってから初めのことだったよね。あれやこれやで延び延びになってしまっていた花火大会。ようやく一緒に出かけることができ、僕はそのときの事を思い出し、今ひとり余韻に浸っています。もしかしたら、気がつかないうちににやにやしているのかもしれない。先ほどから猫たちが不審そうにこちらを伺っています。。

今、僕は窓際にかかった君の着ていた浴衣を眺めています。そして目を閉じるとくっきりとそれを着た君が浮かび上がります。夏の花や草が散りばめられた、目の覚めるような濃い青の浴衣。鮮やかな銀色の帯。ほどよく焼けた木製の下駄。カランコロんと、通りに足音を響かせていたあのときの君は、その笑顔を含めて、まるで御伽噺からそのまま出てきたような美しさに満ちていました。どう言ったら良いのだろう。どんな言葉も安っぽく聞こえてしまうかもしれないけど、やっぱり君を好きになって良かったなあ、と素直に思いました。気づいていましたか？ 街を歩く人々皆、君を見ていたことを。

都会は高い建物に覆われ、音ばかりが響き渡り、なかなかゆっくりと見ることはできなかったけど、あの商店街の隙間でのぞいた花火はとても素敵だったよね。そして、「もっと近寄ってみる？」と所々で足休めしながら、最後に到達した外苑通りで見た花火も、とても非現実的な景色で楽しめました。何所かに腰を下ろし、二人ぼんやりと打ち上げられる花火を見るのもいいかもしれないけど、二人並んで通りを散策しながら聞く花火の音、こんな楽しみ方もあるんだなあ、と気づきました。人混みはあまり好きではなかったけど、結局は君が隣りにいるだけで、どんなところだって楽しめるんだなあ、ということがわかりました。

夏の風物詩。来年は何回行けるかな？

僕の左手には君の右手、君の右手には僕の左手。二人並んで手をつなぎ、音のする方へ足を運ぶ。空にはビルとオレンジの花火。しっかりと心の中に綴込みました。

思い出を振り返りながら、こうして手紙を書くのは良いものですね。色褪せない情景が、いつまでも目の前に浮かんでくるようです。

慣れない鼻緒で、足が痛くなってませんか？

良ければ次は着物を一緒に着てみましょう。

それでは、また。 敬具

『この場所は晴れ、少し先は雨』

拝啓

雨と晴れの境界を、君は見たことがありますか？

だんだんと雨足が弱まり、徐々に晴れ間が見えてくる、というようなことはよく遭遇することがあるかと思いますが（多分）、ここから先は雨、ここから後は晴れ、と本当に線でも引いたかのような境界線。僕は人生で二度ばかり見たことがあります。

それはとても不思議な光景でした。立っている場所は晴れ、しかし少し先に見えているのは雨。じょうろで水を撒いているかのように、その雨は、地面を少しずつ濡らしながら、徐々に僕の立っている場所へ近づいてくるのです。「夕立は馬の背を分ける」ということわざがありますが、まさに言葉通りの光景でした。雨の多いこの季節、もしまた遭遇する機会があるのなら、今度は隣りに君がいるときがいいなあ、と期待しています。雨の中歩くなんて、実際のところあまり好きではないんだけどね。でも、一緒にその景色を見ることができるのなら、雨の日の散歩も少し楽しみに思えてきました。

「わたし、雨の中歩くのって意外と好きなの」と君は言ってましたね。もう少し雨風がおさまったら、一緒にお散歩でもしませんか？ そのときはもちろん、傘はひとつ、少し大きめの傘を差して。

二人寄り添う傘の下
雨打つ音に耳澄ます

お気に入りの白い傘
お気に入りのレインシューズ

アスファルトには水溜まり
わざと踏みつけ君は笑う

いつもと同じ駅までの道
いつもと違う駅までの色

何だか一曲書けそうですね。

そして実は僕は、それとは対照的に、家の中で聞く雨の音が好きです。窓際に座り、静かに降り注ぐ様を見るのも好きだし、容赦なく家屋に打ち付けるような激しい雨を見るのも好き。海洋

上で発達した熱帯低気圧を家の中からただじっと見ていると、不謹慎ではあるんだけど、なぜだか昔からわくわくしてくるのです。

だって、休校を知らせる連絡網を今か今かと待つ時間は、とてもどきどきすると思いませんか？

(会社はさすがに休みにはならないけど、つい期待してしまうよね)

そして今、窓の外ではやはり雨。外の世界が荒れるほど、この部屋の中は穏やかになっていくようです。

君はいま同じ雨を見てるかな？

それではまた、手紙を書きます。 敬具

『やけに平和な午後の世界』

拝啓

「ちょっと待っててね」と君が席を立ち、化粧直しのためお手洗いに行っている間、僕はこの手持ち無沙汰な時間を使って、さっと手紙を書くことにしました(書けるかな?)。

見上げた空には雲ひとつなく、からっとした空気が周囲を漂い包み込み、陽射しはかんかんじりじり隅々まで降り注ぎ、木々の間からは鳥の声と蝉の声。夏らしい、それらすべての八月の景色が、雨上がりのパーキングエリアを支配しています。平日とはいえ、多くの人々でごった返してはいるけど、あくせくしてる人なんてもちろんいませんでした。そのため僕は、都会の喧騒から解放されたことにより、何だかすっかり清々しい気分になれています。

そして、ぼうっと周りを観察していると、とても面白い……とまでは言わないけど、飽きることもありません。運転に疲れたのか、ストレッチをしながらあくびをする人。眠い目をこすりながら、子どもをトイレに連れていく人。スキップをしながら、何やら歌のようなものを唄っている人。携帯電話で現在地を大まかに報告する人(標識がない、と騒いでいた)。もくもくとフードコートで食事をする家族、カップル、友人同士。足元にはリードに繋がれた犬。愛くるしい小型犬、悠然と佇んでいる大型犬(猫はいない)。歩く人の手には、コーヒーあるいはアイスクリーム。ずんだを利用したご当地ソフトクリーム(食べてみたい)。平和な午後の世界がそこには広がっていました。

遠く離れた夏の雲を横目に見ながら、混雑した平日の国道、雨上がりの街を通り抜け、少し長めの橋を渡り、やけに広い高速道路を走ってここまで来たけど、多分僕ひとりならとっくに飽きて途中で引き返していたんじゃないかな、と思います。君がいるから、君が隣にいることで、僕は何処までだって行けるし、何だって出来る気がするし、コンビニの弁当さえも最高のランチやディナーに思えることができるのです。

あ、君がこちらに戻って来るのが見えました。

ではまた幸せな時間に戻ることになります。 敬具

『懐いた猫は、お腹を空かしてただけ』

拝啓

いつものように駅まで君を送って行った後、どこをどうやって帰ったのかあまり覚えていないけど、気がつけば僕は自宅のベッドの上にはいました。左手脇には猫がいて、その黒い身体をくるんと丸めてピツタリと寄り添い、白い方の猫は、少し離れたテーブルの上からじいっとこちらを眺めていました。彼女（猫）は僕が起きるのを今か今かと待ち構えていたようで、僕が上半身をむくと起きあげると、ものすごい勢いで駆け寄ってきました。僕のことを好きで、僕に遊んで欲しくてこちらに走ってくるのならかわいいのですが、その顔は、ただご飯の時間がこれから始まるのではないかと、彼（僕）が起きたことによって、カリカリという総合栄養食をもらえるのではないかと（うまいければおやつなんかも）、という期待の顔と鳴き声のみで、その他にあげるとすると、「早くご飯をよこさないよ。使えないわね」という少し侮蔑を含んだ目だけのようでした。

昨夜君との間で起こった、言い争いにもならないようなくだらぬ出来事を思い出して、猫のように単純に物事を考えることができれば良いのだけだなあ、とつくづく思いました。でももしかしたら、単純な内容であるだけに物事を複雑に捉えてしまい、それをお互いが複雑に解釈し合ったりすることで、あんな風に思ってもいないことで傷つけ合うのかもしれないかもしれません。ちょうどカバンに入れておいたイヤホンのコードが、取り出すときに複雑に絡まってしまっただけのように。根気よく丁寧にひとつひとつ線を辿っていけば、いつかそれは解消されるんだろうけど、目の前の問題に気持ちがはやり過ぎてしまい、永遠と同じ結び目のところで立ち往生してしまっているのです。

楽しいことばかりではないよね。もう少し相手を尊重することが大事なのかもしれません。君を失っては元も子もないということを再認識しました。同じものは何ひとつないのだから。

僕が思う気遣いが君に対する優しさだと思って接していたけれど、一步間違えれば、それはただの優しさの押しつけに過ぎないよね。相手の立場に立って考えることの本質について、僕は考えることをやめてしまっていたようです。それが本当の優しさなのにもかかわらず。

今僕は、君の居ない時間の中ぼうっと部屋を眺めながら過ごしています。いつしか猫も、僕の周りからいなくなってしまうかもしれません（やっぱりお腹空かしてただけのようです）。

洗濯機の音や、換気扇の音。パソコンを打つ音、冷蔵庫の冷却ファンの音、時計のチクタク音、何処かの部屋のピアノの音、廊下を誰かが通り過ぎる音、外から聞こえる工事現場の音。いろいろな音がこの部屋にいると聞こえてくるけど、それはどこまでいっても“ひとりである音”です。ひとりであることがこんなにも静かで寂しい世界だったなんて、僕はすっかり忘れていました。

。

セザンヌの言葉を引用すると

「何か果てしないものが僕らを引きつけ、喜びをもって君と居られる機会をくれたこと」

それだけでも忘れないようにしなければと思います。

ごめんなさい。すっかり真面目な話になってしまいましたね。

次は楽しい出来事を綴れるように。

それではまた、手紙を書きます。 敬具

『猫のごろごろ説と僕の幸せについて』

拝啓

こんなにも静かな夜。僕はつめたく冷えた缶のコーラをプシュッと開け、お膝の上に乗っかった猫の顎の下をゆっくりと撫でながら、こうしてこの手紙を書くことにしました。

猫は「そこじゃないです。あ、はい、そこからちょっと下にかけてが絶好のポジションなのです」という顔をこちらに向け、だんだんと目を細め、ごろごろと喉を鳴らし、最終的にはごろんと膝の上であられもない格好になり寝入ってしまいました。その姿はまるで、昔ながらのお化けの手のようにその両前脚をくにゃんと折り曲げ、後ろ脚はなぜだかピンッと伸ばし、両耳に至っては水に戻した“きくらげ”みたいにふにゃふにゃの様相を呈していたのです。本当、かわいいと思いませんか？ よく見ると、小刻みにヒゲなんかもピクピクと動いています。

猫が喉をごろごろと鳴らす理由を君は知っていますか？ いろいろな俗説はあるけれど、信ぴょう性の高い仮説がいくつかあるみたいです。まず、最も高い理由として有名なのが、ライハウゼンの『赤ちゃんごろごろ説』です。

ドイツ人動物学者パウル・ライハウゼンは、子猫が母猫の乳房からミルクを吸っているとき、よくごろごろという音を出していることに気づきました。ふむ、これはなんだろう、と悩んだ結果、結論として、「母猫に安心感を伝えるため」ではないか、と考えたのです。成長した猫がまるで子猫のようにごろごろと喉を鳴らすのは、気持ちが子猫に戻り、飼い主に対して幸せや安心感を抱いているのではないか、というのが、ライハウゼンの「赤ちゃん帰りのごろごろ説」なのです。

一方、「いや、そうかもしれないけど、もっと医学的見地や、動物学的見地から見るべきだよ」という学者たちが提唱しているのが、イギリス・サセックス大学の研究グループの「要求のごろごろ」と、カリフォルニア大学デービス校の研究チームの「25ヘルツほどの周波数が、骨に刺激を与えて新陳代謝を活発化する」説です。あまりその内容には詳しく触れはしないけど、僕はやっぱり「赤ちゃん帰りのごろごろ説」だったらいいのかなあ、と思います。だって、そんな夢も希望もない理由なんかより、僕に対してこんなにも無防備で、こんなにも気持ち良さそうにしているのだから、赤ちゃん帰り説こそ飼い主冥利に尽きるというものです。そう思わない？

それはそうと、体調はどうですか？ 熱が上がったり、胃が痛んでしまっていたりと、目まぐるしく体調変化に振り回されていると聞き、とても（本当にとっても）心配しています。僕は最近体調はすこぶると言っているほど良いです。でも君に一日会えないだけで心の奥底の誰も手がつけられない部分がチクチクと痛み出します。しかしそれは精神的なもので、心配いりません（ちょっと心配して欲しいけど）。実際的に身体へと及ぼす害と比べると失礼かもしれないから、僕のくだらない理由については、あまり気にしないでください。もちろん、体調についてはいつでも相談してくれると嬉しいです。君の幸せが僕の幸せであり、君の痛みが僕の痛みだからです。

時計の短い針が数字の3を指し、長い針が11を指しました。そろそろ午前3時になろうとしています。猫はいつしか居なくなり（またいつの間にか）、しんとした空気が僕を取り囲み、まぶたもそろそろ今日の役目を終え、早く閉じたい、とざわつき始めています。

明日は久しぶりに長い時間散歩できますね。でもね、無理はしないでください。

散歩なんていつだって出来るし、いつだって僕は君のそばにいるから。

それではまた。 敬具

『今まで見つけられなかったのよ、と君は言う』

拝啓

聞こえますか？ 今、外は雨。この分だと朝までこの雨が続きそうですが、きちんと温かくして布団に入っている、すぐにタオルケットやら毛布やらをベッドの外にはじき出してしまう君を、僕は今日も心配しております。風邪をひいたら最後、長引いてしまうのはわかっているから、どうか身体を大事に休んでくださいね。

それにしても夜は冷えます。梅雨が終わったと思えば、すぐ台風が来ると、台風が過ぎたと思えば、こうして次に始まった“秋の長雨”。この調子で雨が降り続けると、日本くらいだったらすべて水の中に沈んでしまうような気がしませんか？ 僕は雨が降るといつもそんな錯覚に陥ってしまい、ちょっとばかり恐ろしくなります。

まあ、もちろんそんなことはありえないんだけど、でも、果たして本当にそうだろうか？ という気持ちになるのです（しつこい）。

とはいえ、やはり早くやんでほしいものです。

それでも先日は、雨と雨の間に、ゆっくりと散歩することができましたね。

江戸川橋から首都高沿いを西に進み、目白通りを左に曲がる。椿山荘を左手に見つつ、カトリック教会、野間記念館、目白大運動公園（ふうん）、日本女子大学を通り過ぎるルート。道もそれなりに広く歩きやすいので、すっかりおなじみの散歩道になりました。

なかでも、田中角栄邸を見つけて一喜一憂している君は、とても無邪気で、とても微笑ましく思えました。そのことを君に告げると

「だって、今まで見つけられなかったのよ？」と真剣な顔で言ってたけど、東と西とを間違えると朝陽が昇る瞬間に立ち会うことができないように、そりゃあ逆側の家ばかり見てたら気付けないよねえ。確かにあの家は周りと同化してわかりづらい場所ではあったけど、大通りに面しているし、割と大きくて立派な家だったと思わない？

おなじみ、といえ、君が「喉が渴いたわ」と言ったとき、僕が持っていたミネラルウォーターを差し出すと、「わたしはね、仕事の時間以外はお酒しか飲みたくないの」という流れになるのも僕は意外と好きです。

そのセリフを何処かで言いたいし使ってみたいんだけど、お酒が飲めない僕としては、使う機会のないまま悶々とした日々を送っています。

いつか飲めるようになるのだろうか。飲んでも良いことなんてないのかもしれないけど、やっぱり憧れなのは、ホテルか何処かの洒落たバーで、スコッチをロックだかストレートでじっくりと飲むこと。ハイ・ボールくらいだったらまあ何とか飲めなくもないんだけど、あれは居酒屋みたいになっちゃうから、と思って。まあでもイメージ先行の憧れなんていうのは、多分、憧れのままでいいかなあ、って気はしています。

そして、不忍通り、明治通りを越えると、目白から南長崎までしばらく何も無いようなガランとした道が続き、山手通りに入ると途端に道は広くなり、ガヤガヤとした雰囲気になりました。

。でもやっぱり僕はあの目白から南長崎までの、しん、とした雰囲気散歩にはつきものじゃないかなあ、と思います。だって、僕と、君、その他は時折通り過ぎる車の音だけだから、静かにゆっくりと二人の会話を楽しむことができるしね。

今度は少し趣向を変えて、目的地を決めずに歩いてみましょう。

そうだ、中央線沿いから始めるのはどう思う？

それではまた。 敬具

『どちらが匙を投げるか』

拝啓

話を通じるか通じないか、理由を説明しなければいけない人には、理由を伝えたってわかってもらえない。説明しなければいけないのなら、最初から説明する必要なんてない。そんな仕事を僕はしています。

突然そんなことを言われてもわからないかもしれないけど、おそらく君も同じような仕事をしていると記憶しているから、多くは語らなくてもわかってくれるのではないかと期待しています。

でも、もしかしたらそれが間違いではないか、ということに今日思い当たりました。

君は疲れていてもなるべく笑顔を見せて、楽しかったこと、気に入らなかったこと、そういった今日あったことを話してくれます。

僕はそれを受け流すことはせず、少しでも何か糸口を見つけることはできないかと、真剣に話を聞いています。

本気で困っていることがあれば、何とかしたいと思うし、楽しかったことがあれば、その楽しさを僕も共有したいと思うから。

しかし、僕の誤算としては、“ただ話を聞いて欲しいだけ”、ということに思いあたらなかったこと。

いや、気づいていたのかもしれませんが。男性は原因を探る、女性は話したいから話す。

そんな根本的な部分をわかっていたつもりになっていました。

以前も同じようなことがあったよね。正直自分としてはニュアンス的に別問題だと考えていたんだけど、大きいカテゴリーの中では結局同じことだから、君はあんなに腹を立てたのではないかと今ならわかります。

「なんでそんなに嫌な気持ちにさせるの？」

僕は言葉を失いました。何も言い返せないし、何を言っても意味を持たせることができないと感じました。

それはまるで、ドアの無い部屋に閉じ込められたときのような絶望感。

それはまるで、最後の思いを伝えられなかったときのような悲壮感。

何が悪いとか、誰が悪いとか（もちろん僕なんだけど）、そんなレベルの話が続けている限りは、一生かかっても君の本当の思いや気持ちにたどり着くことなんてできないかもしれません。

でも僕は、一生かかっても君の本当の気持ちや思いを、少しでも理解したいな、と考えています。

どちらが匙を投げるか、かもしれないけど。

少なくとも僕は。

笑顔が恋しいと思って、眠りにつくのは寂しいよね。

笑い合ったことを繰り返せることができれば良いのだけど。

それではまた、手紙を書きます。 敬具

『簡単そうで、それでいて難しい問題』

拝啓

こんにちは、お元気ですか？

降ったりやんだりの不安定な天気のように、君を想うこの不安定な気持ちが、僕を終わりのない暗闇の中へ引き摺り込もうとしています。これから何処に行きたいのかも、これから何処に行けば終着点なのかもまるで見えてきません。もしかしたら、この複雑化された気持ちには何か〇〇病、のように、何か特殊な病名でもつくんじゃないかと危惧しています。

“何も言わないのは、何も言えることがないから”、“望みは、望まないこと”と誰かが言っていたように、人は多くのことを望み過ぎてしまうのかもしれない。もちろん、僕に関しても例外ではありません。

愛してもらうにはどうしたら良いか、なんて、これまで正直あまり考える機会なんてなく、簡単そうで、それでいてとても難しい問題にぶつかってしまっています。まあ、あまり悩んでも仕方の無いことだけど、自転車がいつの間にか簡単に乗れてしまえるように、いつか気が付けばすべてが丸く収まっていて、何であのとき僕は、あんなことで悩んでいたのだろう、どうしてそんな簡単なことに思い当たらなかったのだろう、と思うのかもしれない。ただ、黙って傍観しているだけではダメだけどね。

それというのも、楽しいことと、そうでもないときの差が激しくかけ離れているのがおそらくその気持ちに拍車をかけているんだと思います。

君を想像するだけで、君の手を繋ぎたいと思うし、君を抱き締めたいと思う。君が隣りにいるだけで、君が何を考えているのか知りたいと思うし、君が何処に行くのかを知りたいと思う。

角度を変えて見てみると、それは僕の独りよがりな考え方でしかないこともわかります。

「またね」と手を振って微笑む君を思い出す。

もしかすると、あれが君に会う最後だったかもしれない――。

会えない時間、僕はこんなことばかり考えています。

こんなことを考えていても、その現実に対応する勇気なんてないんだけどね。

そして自分に、「大丈夫」と言って

今日も眠りにつくのです。

それでは、また。 敬具

『それでも僕は』

拝啓

しとすと、と雨の降る中、僕は少し遠くまで散歩に出かけることにしました。今のこの気持ちや思い何ていうものを、一体僕はどのようにどうやって表現して良いか分からない複雑な心境で、このままではこの狭い世界の中で息が詰まりそうになってしまうと思ったからです。この気持ちというのは閉所恐怖症の患者が、四畳半程度の部屋に無理矢理閉じ込められたときの心境と似ているかもしれません。もちろん、似ていないかもしれません。

傘を差さずに歩き、直接的に雨を浴びることでこのくだらない感情が浄化されることを期待していたのですが、身体がただ冷たくなり、靴の先がびしょりと濡れるだけで、残念ながら何の解決にもならなそうです。むしろ余計に面倒な気持ちが顔を出し始めた気もしています。

すぐ横を走り抜けるバイクや車、わざと長靴で水たまりを歩きながら、水しぶきではしゃぐ子どもたち、彼らはその泥にまみれた水が、自分以外の誰かに当たることなんて想像すらしていないのでしょうか。次々と僕のパンツや靴何かに容赦なく泥が撥ねていきます。いや、すみません。捉え方次第でこうも自分の心が蔑んでいくとは、僕もそのことには思い当たりませんでした。

これは、出来る限り早く自宅に帰って、温かいシャワーを浴びて、温かいコーヒーを飲んで、温かい猫たちを抱きかかえて、温かい毛布にくるまって、温かい夢を見ながら眠りについた方が良さそうです。

君の存在を求めることで得るものと、どうしたって得ることができないものが浮き彫りになり、今こうやって自分自身の弱さと向き合うことになってるんだけど、これって答えがあると思いますか？

時間のすれ違いや気持ちのすれ違い、その他いろいろなことが、外交問題のように次々と浮かび上がり、そして次々と僕を悩ませる。でも、そうは言っても、そんなことは大して問題ではないよ、という気持ちも、後ろから声をかけてきます。

結局のところ、何が不安なのか、何で安心するのか、というのが見えてこないのです。

でもね、こんな鬱っぽい気持ちをただただ書き綴っているけれど、本当は、今のこの幸せのしっぺ返しを恐れているだけなのです。代償は払わなければならない。今日より幸せな日があるはずがない。明日になんてなってほしくない。自己中心的な自分のわがままな気持ちなのです。

それでも僕は明日を生きなければならないし、眠りにつかなくてははいけません。

君が僕を想う気持ちと、僕が君を想う気持ちとを、細かく何分割かして、銀行か何処かに預けることができれば良いのだけど。そうすれば、いつでも好きなときに引き出せて、いつでも好きなときに幸せな気持ちを体験できるよね？

変かな？

だって、この想いが一生担保されることはほとんど不可能に近いと思いませんか？

それではまた手紙を書きます。次は幸せな出来事を綴れるように。 敬具

——追伸、させてもらっていいかしら？ とソファの上で眠っていた彼女（猫）が声をかけてきた。

「あなたが鬱になるのは勝手だけど」と彼女（猫）は言った。「その迷惑な考えをなりふり構わず無償で周りに配り歩いていたら、知ってた？ あの歴代続く独裁国家の代表と同じレベルなのよ」

手厳しいね、と僕は思った。

『夏の午後と秋の夜』

拝啓

そよそよと通り抜ける風が、夜になると少し肌寒い今日この頃、君は体調を崩さずに元気でお過ごしでしょうか。もちろん、夜だけじゃなく朝方も寒いんだけど、あの肌にふわっと吸い付くような少し大きめの毛布が、そのぴりっとした寒さを十分に和らげてくれています。君のいない寂しさなんかも和らげてくれると良いのですが、そういった機能はまだ特に付いていないようです。

人間が火星を目指す時代、そろそろ身近なその問題を、何とか改善に向けて本気で取り組むことに力を入れなければいけないと思いませんか？

環状2号線問題より、その問題の大きさは計り知れないものなのね。

人々が頭を悩ませる出来事が、僕にとっては本当にどうでも良いことで、僕はいつも、君との大切な時間をどうやって過ごせばいいのだろう、どうやって過ごせば、もっとも有意義な時間の使い方になるのだろう、ということばかりを考えています。

それというのも、君との有限な時間が目に見えて減っているからなのかもしれません。

このストレス社会において、その波に流されず、飲み込まれず、それを逆を取り込んで生活していくには、君という存在が不可欠であるから、何となくこんな気持ちになるのでしょう。

生きると言われれば、君のいない世界でだって生きられると思う。しかし、それはただ生かされているだけであって、生きている、ってことにはならないのです。

そんな中で、何となく生きてても、つまらないよね。

君のいない世界は、ソファの無いリビングルームであり、クーラーのない夏の午後みたいです。

不安というわけじゃないんだよ。

君が居なくなることで、想像しておかなければいけない物事のひとつだから。

秋の夜、僕はそんなことを考えてました。

それでは、また。 敬具

『お月様の月への手紙』

拝啓

コインか何かのように白く光る月の下、淡く照らし出された月の下の街、目的地も決めずにただひたすら僕はその淡く光る月の下の夜道を、君宛てに書いた手紙を片手にぶらぶらと歩いていました。月明かりやら街灯やらが煌々と辺りを照らすのを眺めながら、眠ることのない24時間営業のコンビニの明かりを頼りにただひたすらと。煩わしい携帯電話は自宅のベッドの上に置いてきました。え？ だってさ、そうしないと着信音が鳴る度に君からの連絡を期待してしまうから。

自宅から駅方面へと進み、押しボタン式の信号を通り過ぎ、住宅街を抜けるときに気付いたのですが、まだ自宅から数百メートルしか歩いていないにもかかわらず、その僅かな区間だけで歯医者が三つも四つも建ち並んでいることに気付きました。もちろん僕も歯医者に行くことはあるけれど、毎日通る道のはずなのに今までその存在にまったく気付きませんでした。どうしてだろう？ 君は知ってた？ 少しピントがずれてるかもしれないけど、僕は歩きながらこんなにも世の中には歯に問題の抱えたひとがいるんだなあ、なんて妙に感心したのです。

そういえば以前君も親不知を抜いてその痛みでぐったりとしていたときがあったよね。君が痛みで苦しんでいるとき、まだ引越したての土地で土地勘もない僕は、携帯電話で最初に見つけた歯医者へ早く君を連れて行かなければ、と焦っていました。近所にこんなに沢山歯医者があることを知ってたら、わざわざあのとき遠く離れた場所まで連れて行くこともなかったね。僕はおろおろするだけで冷静な判断がくだせなかったみたいです。僕は君の痛みに対して何も有効な手段を講じることが出来なかったけど、多分世界中で僕が一番心配していたのだけは伝わっていたと思います。まあでも、横で「大丈夫？ 痛い？」なんて繰り返し言われても「当たり前だろ」としか思えないよねえ、配慮が微妙に足りなかったあのときの僕を許してください。

そうして何軒かの歯医者を越え、右手に幼稚園、左手に飛行機公園を通り過ぎ、高架下をくぐりながらぐるっと右に進み、また大きな道路へと戻ってきました。角にある喫茶店を左に曲がりまっすぐ進むとそこには急勾配の坂があり、坂を下ると川があり、ウバミソウやセンブリ、コセンダングサやベニバナホログキを眺めながら橋を渡ると、郵便局が左手にありました。こんな真夜中に郵便局が開いているはずもなく、ポツンと立っている赤い箱だけが非現実的な手法を用いた物語の主人公のようにその存在を主張し、紙一重で僕と現実世界を繋いでいるようにも見えました。夜の街の真ん中で突然目に飛び込んでくる赤い色。何度見ても慣れることはない赤い箱。そして僕はこの赤い箱の中へ、僕の気持ちを余すことなく閉じ込めた君宛ての手紙を放り込み、しばらくその赤い箱を眺めていました。じいっと眺めていた理由としては、先ほど放り込んだ手紙をやぎだかヒツジだか乳牛だかそんな草食動物のように、その赤い箱がモソモソと手紙を咀嚼し始めるんじゃないかと思ったからです。もちろんそんなことはありえないんだけど、大体において普通手紙を放り込んだらその行方を気にすることなく皆すぐ何処かに行ってしまうじゃない？（少なくとも僕は）だから、もしかしたら.....なんて思ったのです。そんなどうでも良い気持ちになるのはいつものことなんだけど、あんまりじいっと眺め過ぎると、不思議なことに「そんなこともたまにはまああるよね」という気持ちになります。多分。ちょっと今度誰かに同じ気持ちになるか聞いてみようと思います。

それはさておき、長いことじいっと眺めていると、その赤い箱が何か不吉な物体のように感じ始めたので、僕は右手でコンコンとその硬さを確かめて（ちゃんと硬いかどうか）、また夜の道へと戻りました。

君と一緒に歩いた道は、君と一緒に歩いたときと同じようにこの街に広がっていて、君と一緒に笑った時間も、同じようにこの街に閉じ込められています。僕の気持ち何かもそのときの時間と一緒にそのまま閉じ込めてしまえば良かったんだけど、どうしてかなあ？ その気持ちは決して僕の心の中から消えようとしません。君の居なくなった今、それだけでも僕の心の中から剥がれ落ちてくれれば楽になるかもしれないのにね。

ねえ、思い出は風化すると思いますか？ 散歩途中に見つけたおかしな看板も、街を歩くおかしな人々も、それらにいちいち突っ込みを入れる僕なんかも、一向に同じ場所から移動しないし、消えないのです。何故だろう？ 「恥ずかしいからやめて」と言っていた君だけが、僕の前から永遠に消えてしまいました。

「大丈夫、いつか傷は癒えるよ」

.....わかるかな？ そうじゃない。そういうことを言ってるんじゃないんだ。もちろん傷はいつか癒える。癒えると思うよ。でもね、でも、そんなに僕はそんな長い時間待てそうもないよ。だって、君に似た後ろ姿や少し俯いた横顔や肩にかかった髪の毛や左に流れた前髪や笑ったときのくしゃっとした顔や声や皺や仕草やくしゃみをしたときの鼻のすすり音や起きがけに目を擦る音やお気に入りだったホワイトのセーターやカシミヤのマフラーやネイビーのコートやページのバッグや豹柄のポンプスや携帯電話のいつもの着信音や.....そんな君の影を街中に見る度に、涙が溢れて仕方がなくて、君がもう何処にも居ないという事実が、それだけが僕にのしかかってくるのです。

僕はあの日からどうしたら良いのかわかりません。`ぜんぜん、わかりません。わからないから届くことのない手紙を書き続けてます。もう何枚書いたのかも忘れてしまいました。

ねえ、宛先不明の手紙の行方はどうなるんだろね。やっぱり棄てられてしまうのかな？

いつものようにくたくたになるまで歩いた後、また今日も机に向かってこの手紙を書いています。

多分明日も。

それではまた、手紙を書きます。

いつかお月様に届くまで。

敬具

『お月様の月への手紙』

<http://p.booklog.jp/book/107875>

著者：朔太郎

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/jedimaster/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/107875>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/107875>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ